大阪の旅 2024

旅のチカラ研究所

2024 年 11 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

東京に住む旧知の友人たちと大阪へ 1 泊 2 日の旅行をしてきた。私は今回の旅を大阪の魅力を再発見する旅として、大阪らしい場所とそうでもない場所に行ってきた。

■大阪の魅力再発見へ

1979 年、私は大学を卒業して電気メーカに就職した。その時に同じ職場に配属になった同期入社の連中とは半世紀近く付き合いが続いている。そしてその彼らとは毎年旅行にも行っている。

その旅行について、今年は関東圏を離れて大阪に行くことというになり、1 泊 2 日の旅を私が企画・計画することになった。

大阪の旅を企画するにあたり、私は「大阪の魅力再発見」をテーマにした。

なぜ再発見なのかというと、私はかつて大阪に住んでいたことがあり、他の連中も多少なりとも大阪在住経験があるから有名観光地は知り尽くしている。そこで私は大阪城や USJ などの定番の観光名所ではなく、むしろコテコテの大阪と、とても大阪観光とは思えないような新しくて斬新な施設を選んだ。

■吉本新喜劇

その第 1 日目、コテコテの大阪といえば何といっても吉本興業だろう。その劇場「なんばグランド花月」の前で皆と待ち合わせする。

入口にはお笑いとも、サーカスとも、映画の撮影とも思える画が飾ってある。そして入場券にはありがたいことに昼食に食べる穴子めしの交換券が付いている。

この何でもありの世界が、いかにも大阪らしくて、何故か私は安心してしまう。

【劇場入口の画】

この劇場のキャッチコピーは、日本最高峰のお笑いが集まり、ベテラン芸人やテレビで人気の若手芸人の漫才や落語、お馴染みの吉本新喜劇が朝から晩まで楽しめるとなっている。

何を隠そう私はこの劇場に初めて訪れる。日本最高峰の大阪の笑いの真髄を肌で感じたく、そんな期待をもって入場する。

残念ながら撮影禁止なので、公演の写真は撮れないが、演目だけは撮っておこう。

座席は 858 席もあり、東京都内最大の浅草演芸場は 340 席だから、大阪の笑いに対する姿勢を感じる。

座席が多いから修学旅行の生徒たちも多く入っており、たまたま出くわした生徒に聞くと大分県から来た中学生だという。生徒たちは USJ を希望したらしいが、大人の事情でこちらになったらしい。

いよいよ公演が始まる。大阪のお笑いの特徴はテンポとか、ツッコミとかと言われているが、実際に私が劇場で感じたのは、そういう技術的なものだけではなかった。

舞台と客席とのやり取りに始まり、やがて演じる側と観る側の垣根が取れていく。そして最高潮に達する頃には会場全体が一体になって笑いと涙に包まれていく。これは東京ではあまり体験できないだろう。

【本日の演目】

公演時間は約 2 時間 30 分、私たちはもちろんのこと、あの中学生たちも大阪のお笑いを大いに楽しむことができたようだ。大人の事情とはいえ、誰の顔を見ても満足感で満たされていた。

■道頓堀

なんばグランド花月から 10 分も歩くと道頓堀に出る。有名なグリコの看板があり、戎(えびす)橋の近くは多くの人でごった返している。

大阪と言えば粉モノ文化、お好み焼きやたこ焼きの店は大そう賑わっている。それも外国人が圧倒的多い。

私が「平日の昼間だというのに、観光客が凄いね」と言うと、仲間の誰かが「外国人観光客には曜日は関係ないからね」と言っている。確かにそのとおりで、私も海外旅行に行くと曜日は関係なくなる。本日は国内旅行だが、会社勤めのない私たちにはもはや曜日は関係ない。

時刻は午後 2 時、この時間を利用してお好み焼きを食べるという選択肢もあるが、公演中に食べた穴子めしでそんなに腹は空いていない。

おやつ代わりにたこ焼きを買うと、大きなタコが入っている。タコは欧米ではデビルフィッシュと呼ばれて嫌われているが、ここではその欧米人たちが美味しそうに食べている。おそらく彼らは何も知らないで食べているのだろう。

■道頓堀クルーズ

道頓堀リバークルーズの発着所があるから、早速チケットを買い乗船する。

座席に着くと、船の前方で立っている案内役の若い女性クルーが、挨拶も早々に「この中に日本人は何人いますか？」と予想外の質問をしてきた。すると私たち含め 10 人程の手が挙がる。船には 50 人くらい乗っているので、日本人は 2 割しか乗っていないことになる。

以降、彼女は日本語混じりの英語の案内をするようになる。

彼女は単に建物や橋の説明をするだけでなく、元気いっぱいの笑顔で歌やダンスを魅せてくれる。おそらくはどこかでダンスパフォーマンスをやっていると思わせるレベルで、ちょっとハイカラな“大阪の姉ちゃん”といった感じだ。

乗客たちは道頓堀を背景に、彼女のエンターテインメントを楽しんでいる。

【道頓堀リバークルーズの船上から撮影　左が女性クルー】

道頓堀の風にあたりながらの大阪の姉ちゃんとの楽しいクルーズは、20 分ほどで終了する。

乗船前には 20 分は少し短い気もしたが、かえって長々と乗らずに道頓堀を味わうことができた。この早いテンポもまた大阪スタイルなのだろう。

■カニ尽くし

宿泊は私が定年まで勤めていた会社、つまり同期と一緒に入った会社の保養所が大阪にあり、そこに泊まる。

大阪在住の私の旅友が、「この時季の大阪は何と言ってもズワイカニだよ」と言っていたので、この保養所の“カニ尽くしプラン”を予約した。実は私は毎年この時季にカニ目的でこの保養所に泊まりに来ている。

先付け以外はカニのオンパレードが続く。カニ珍味三種盛り、ズワイガニ姿蒸し、カニと沖魚の刺身、カニの天ぷら、カニ味噌の甲羅焼き、カニすき鍋、最後はカニ雑炊で締めくくった。

これには皆も大満足で食欲旺盛に食べてはいるが、さすがに若い頃のように食べられない。
誰かが「お互い若くないからなぁ、でもよく食ったよ」と言いながら持参した薬を取り出して飲み始める。そして次々に薬を飲む人数が増えていく。こんな光景もまた、時の流れを感じさせてくれる。

【カニ尽くしで乾杯！】

■徳島の大塚国際美術館へ
2 日目は、大阪駅から高速バスに乗り、淡路島を経由して名物の渦潮を眼下に見て大鳴門橋を渡ると四国の徳島に至る。そこには国内外から高い評価を得ている「大塚国際美術館」がある。
大阪駅から約 2 時間で美術館の入口に着くから、大阪から日帰り圏内と言ってもいいだろう。しかしそのことを知る人は意外に少ない。

大塚国際美術館は、大塚製薬グループが 1998 年にオープンさせた。約 1000 点の西洋名画を本物と同じ大きさの陶板で複製し展示している。年間来場者数は約 42 万人、建築費や各種使用料を含めて総工費 400 億円を費やした。
ただしオープンまで苦難の道だった。鳴門海峡に面した砂浜の砂でタイルを製造する大塚オーミ陶業を 1973 年に設立させたが、オイルショックで受注がなくなった。そこで陶板に絵を描いて美術品を作ることを思い付きその技法を確立し、大型美術品の陶板化に成功した。
その技術を活かし、グループ創業 75 周年記念事業として 10 年の歳月をかけて完成させた。

従って展示物は全て複製品だが、精巧に複製しているので素人には見分けがつかない。
複製品なので写真撮影も許されており、手で触れることもできる。さらに 2000 年以上も劣化しないというから、美術品の長期保存にも適している。

■入館
入館するとすぐにシスティーナ・ホールがあり、ミケランジェロの大作が描かれている。このホールは 2018 年の NHK 紅白歌合戦で歌手の米津玄師が生中継したことでも有名だ。
私は 2 回目だが、他の連中は初めて来館するので、このホールだけで相当驚いている。

【システィーナ・ホール　右はクリスマスツリー】

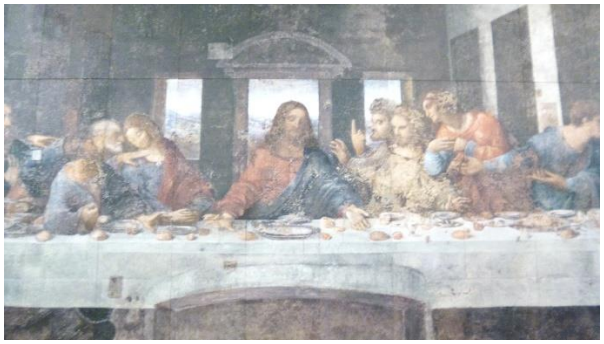
この美術館は順路だけでも 4km もあるから、順路通りに立ち止まらず歩いても 1 時間かかることになる。これをいかに効率的に巡るかがポイントだろう。

ちょうど 11 時から館内見学無料ツアーが始まるので、私たちはそれに参加し、古代からルネサンスまでの展示を観る。

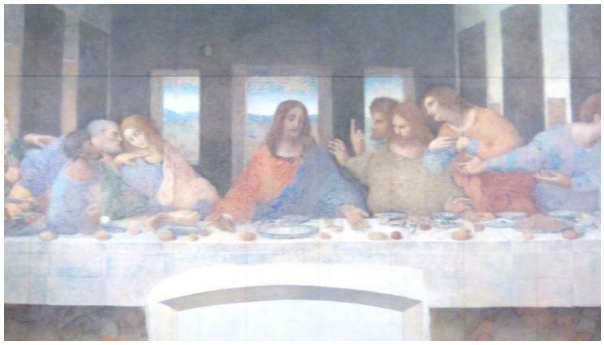
有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」は 4.2m×9.1m という巨大なもので、本物はミラノの修道院の食堂の壁に描かれているから他の場所に移動させることは不可能だが、複製技術で現地の壁画をスキャンして陶板に焼いたのでここで観ることができる。

もちろんそれは凄いことだが、さらに凄いことがある。

最後の晩餐は 1498 年に描かれてから約 500 年経っておりかなり劣化していた。そのため 1977 年から 22 年もかけて修復された。驚くべきことに修復前と修復後の 2 つ壁画が向かい合うように展示されている。こんな展示はここでしかできない。



【最後の晩餐　修復前】



【最後の晩餐　修復後】

館内見学無料ツアーは美術館の展示の約半分で終わりになるが、要所だけを駆け足で回ったにも関わらず、1 時間半も費やしてしまった。

休憩を兼ねて食事をとった後は、ルネサンスから現代、テーマ展示を自分たちで観て回る。

モネの「睡蓮」は、世界中あちこちの美術館で所蔵しているが、パリの「オランジュリー美術館」のものが一番大きい。この「大睡蓮」は自然光の下で観てほしいとモネが言い残したというもので、オランジュリー美術館も自然光がさしこむ展示になっている。

しかしここ大塚国際美術館では、自然光がさしこむどころか完全に直射日光の下、つまり屋外にある。これは陶板だからこそできるのだろう。

【屋外にあるモネの大睡蓮】

結局、私たちは「モナリザ」、「ゲルニカ」、「ヒマワリ」、「落ち穂拾い」、・・・とにかく知っている西洋名画を全て観ることができた。しかし逆に自分はたったこれだけしか知らなかったことに失望し、落胆してしまう。

ひととおり館内を観終えて同期の連中は、「贋作なのに凄い」とか、「本物を観るために現地へ行きたくなった」とか、「思いがけなくこの美術館を知る事ができて良かった」とか、「西洋絵画の知識の再確認ができた」とか言っている。

そもそも大阪から簡単に来られたことが予想外だったこともあって、大満足だったようだ。

大塚国際美術館に約 5 時間滞在して大阪駅に戻ると、時刻はまだ 19 時前で、東京まで余裕で帰ることができた。

かくして大阪再確認の旅は大成功に終わった。

■旅の記録

実施は 2024 年 11 月 27 日（水）～28 日（木）、その行程を示す。

・1 日目　「なんばグランド花月」に 10 時 30 分集合し入場、昼食は場内で穴子めしを食べ
閉演後に道頓堀でたこ焼きを食べ、14 時 30 分道頓堀リバークルーズ（20 分）乗船、
16 時に会社保養所にチェックインし、夕食はカニ尽くし

・2 日目　朝食後の 7 時 30 分に保養所を出発、8 時 30 分大阪駅発の JR 高速バスに乗車、
10 時 40 分に「大塚国際美術館」到着、美術館見学中に館内で昼食、
15 時 52 分大阪行きバス乗車し、18 時 40 分大阪駅到着して解散

尚、私は大阪で所用があったので保養所で前泊及び後泊をした。

費用は約 68000 円になった。詳細を以下に示す。

・宿泊費　19749 円（保養所の 1 泊 2 食 1 人分　カニ尽くし優待、夕食時のアルコール代含む）

・交通費　36029 円（1 人分）

自宅～大阪往復	19465 円（ジパング倶楽部で 3 割引き）
大阪～徳島大塚国際美術館往復	6924 円（一部回数券を利用）

・入場料　10300 円（1 人分）

なんばグランド花月	5500 円（穴子めし付き）
大塚国際美術館	3300 円
道頓堀リバークルーズ	1500 円

・その他　約 2000 円

たこ焼き	365 円
大塚国際美術館昼食	1200 円
酒・つまみ	約 500 円

上記とは別に前泊と後泊の費用として約 20000 円がかかった。

宿泊費	12000 円（1 泊朝食付 6000 円×2）
大阪在住の旅友と飲食	約 4000 円
夕食と朝食、交通費など	約 4000 円